



御
指
一
葉
集

六

^ 5
4110
6



門利5
號4110

邑蕉翁卷句附合文章茶話俳句遺法消
息也一代之風藻雖不可若干茲所謂親覲
於古書收藏於他庫者悉以舉焉

俳諧一葉集

前後篇九冊

東都中橋北榎甲

一具菴藏梓

序

俳諧者死常乞而中格妙門也
世人妄謂一時戲言綺語也豈
夫然耶蓋能致知而達理之常
變氣之順逆固守自得遊心於
太虛則語默作之無有不善故



棄名利而造之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家整舉不外乎
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風
靡今雖其流間有渚者泝源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可

謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼筤

林中之谷神齋 西蘭



俳諧一葉集紀行之部

古學庵佛号
幻窓 湖中 編
坎窩 久藏 校

甲子紀行 又稱野
曝紀行

本屋千松立て浪野を色に三更月二舟白入といひけん
むの人の杖すすううと真享甲子秋八月江上の破屋を
とむるはどのありそそるさふけり
清きうーいんるるうんは志むるうれ
秋十とを却して江戸もさきう古
并らうららあゆまふれちうかへらう

俳諧一葉集紀行之部
古學庵佛号
幻窓 湖中 編
坎窩 久藏 校

余信千代のしるしをよみて
神奈川入るもゆきさすきし
も居のいけほのうつくし
峰の如風をよみむるも
三十一日

ありきの棟にあらぬ女
牛のうしろ女幼行
女ありあはるる屋
う散白きくしりき
葉のまやや
閑人の草舎をけり

草植す竹四五をれ
うら

長月のはじめに帰る
くぬし何事にもわ
まゝに命をてとの
まゝに女の白髪
あゝとと志す

大和のうしろ柳
多里の田里
二上
河
ともし佛

とん山(と山)の年をく

流聲(りうせい)了(りょう) 岩乃(いわの) 餅林(もちの) 田(の) の

春(はる)の(はる)の(はる)の

ま(ま)れ(れ)や(や)ら(ら)あ(あ)ふ(ふ)山(の)の(の)の(の)の

二月(にがつ)の(の)の

水(みづ)取(と)り水(みづ)の(の)伝(つた)は(は)岩(い)の(の)の

亭(てい)の(の)三(さん)井(せい)秋(あき)風(かぜ)の(の)山(の)を(を)訪(たず)ね

梅林

く(く)は(は)白(しろ)き(き)の(の)花(はな)の(の)や(や)紅(べに)き(き)の(の)花(はな)の(の)

梅(うめ)の(の)木(き)の(の)花(はな)の(の)か(か)ら(ら)の(の)ぬ(ぬ)す(す)の(の)の(の)の

伏見(ふし見)西(にし)岸(ぎし)寺(てら)任(にん)口(くち)上(の)人(ひと)の(の)海(うみ)を(を)

糸(いと)衣(え)の(の)伏見(ふし見)の(の)梅(うめ)の(の)糸(いと)を(を)よ

大(おほ)津(つ)の(の)ち(ち)の(の)山(の)海(うみ)を(を)く

山(の)海(うみ)を(を)く 向(むか)ひ(ひ)の(の)海(うみ)を(を)く 向(むか)ひ(ひ)の(の)海(うみ)を(を)く

梅の海

か(か)ら(ら)の(の)梅(うめ)の(の)海(うみ)を(を)く 梅(うめ)の(の)海(うみ)を(を)く

梅(うめ)の(の)海(うみ)を(を)く 梅(うめ)の(の)海(うみ)を(を)く

梅(うめ)の(の)海(うみ)を(を)く 梅(うめ)の(の)海(うみ)を(を)く

吟行

水(みづ)の(の)海(うみ)を(を)く 水(みづ)の(の)海(うみ)を(を)く

水(みづ)の(の)海(うみ)を(を)く 水(みづ)の(の)海(うみ)を(を)く

命(いのち)の(の)海(うみ)を(を)く 命(いのち)の(の)海(うみ)を(を)く

伊豆(いず)の(の)山(の)の(の)海(うみ)を(を)く 伊豆(いず)の(の)山(の)の(の)海(うみ)を(を)く

伊豆(いず)の(の)山(の)の(の)海(うみ)を(を)く 伊豆(いず)の(の)山(の)の(の)海(うみ)を(を)く

ひまわりけれハ

いそいでしう結まららん 子枕

此炬多しきう言高覺寺の大願あるまらぬ月のけり

此化しきうまらぬ言の心地さうまにまのそ

其角各一アツのりし

栞多しう卯の心をいふまあるるれ

路社玉

白けしう卯そく控はかきし

二う山桐奈子の物しゆらうまわすあまらぬ

牡丹葉涼くまけわの増はる我ハ

甲斐の山中まらぬ

ゆく物れ表すふくまむるう

卯月の末尾しゆらぬ旅の芳とくまらぬに
まらぬいさうまらぬみまらぬ

ぬくもりのや石のおよしの昔のな
縁ありやがこまの影くまのな

宗波
曾良

田家

かろけけけ田圃の影や里の秋
秋のうらに赤やとれん里れ月
影の子や稿すうけく月をこら
芽の紫や有さの里れ焼えけ

枕青
宗波
枕青

野

もよもや一花すうけ秋ころと
秋の秋もすうけゆく時るうき
秋もや一花ハやとさ山の
菊は自準よかす

曾良
枕青

城をよもろ手右の友す
秋をこめくらくわのき
月入んとしひのむる舟とえ

松江
枕青
曾良

貞享丁卯仲秋末五々

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

とく回友祝疎門人おめりハ侍寄文章をもくす所の成り
字難の料を包く志を尺寸の三月の程を抄りて
一芥の力を入す紙衣錦子といふもの帳子志す一法や
物心に結つたといふもあやうき者といふや
或ハ小冊をくくおめり後一巻の巻の巻者
ゆく巻を祝一巻結を結め外すつてマノ
そ通すといふといふと物めうといふ
そもくそのり紙やそのの紀も長
以情を盡すといふは似たりといふ
らといふといふといふといふ
ゆふのそら向侍屋よりたれといふ
何といふ川といふといふといふ

若菜新のさくらといふといふ
此風京口を訪り山鏡也亭の昔
あり風やのさくらといふといふ
矢ややまのたけくらすのたけくらす
人の護きすといふといふ

四時の中

花も丹雅亭のついでといふといふ
みよといふといふといふといふ
さくらといふといふといふといふ
みよといふといふといふといふ

伊勢山田

伊勢山田の花をよみて

程の八まじりまゝに

菩提山

け山は止りて

龍尚舎

物のまゝをまゝに

彌代民部

梅の木をよみて

字虎舎

芋植をよみて

津垣のくらを梅一本をよみて

目かきよきつれは

津垣やわの

やまのまゝをよみて

ひく枝のよき

ひく古のよき

旅のよき

旅のよき

旅のよき

旅のよき

乾坤無位同行二人

早花より早く咲く花は
扇に風を吹くやあはれ

昔は水

まきの木より花は

一花のちりては
さるる月の影を
振返るの後の
これより早く
はもやうに
さるる花の影

言妙

父母はききに

あはれ

和歌

紀三井

花はちりては
かみはきき
造化の
人の愛
八重の
はな
さるる花の影

又の風程何人か出たはるなりしをいふは
 古めしうかたはるなりしをいふは人の心
 つらうかたはるなりしをいふは人の心
 中より指し出たはるなりしをいふは人の心
 人かたはるなりしをいふは人の心

更衣

此の程より一りかたはるなりしをいふは
 上へ申すかたはるなりしをいふは人の心
 淨佛の心かたはるなりしをいふは人の心
 此の程より一りかたはるなりしをいふは

淨佛の心かたはるなりしをいふは人の心

菩提寺住持和尚本願の対船中七十餘人の衆を
 導きしをいふは人の心

舟中の中は風吹入りて眼をさすもさすも
 此の程より一りかたはるなりしをいふは
 大坂よりゆり人の心
 世に子をかたはるなりしをいふは人の心
 此の程より一りかたはるなりしをいふは
 月ハ何れも見るも中より一りかたはるなりしをいふは
 舟中の程より一りかたはるなりしをいふは
 舟中の程より一りかたはるなりしをいふは
 舟中の程より一りかたはるなりしをいふは

春の移りゆくみあはく他人の将らまはけり花のた
えしる尺さるる

海士のうねまのしるしやけり

東次西次へ信使をよむわらうとれくあふらうの何と
すくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かこくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
おきやうちくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
古戦場の跡をよめしるしやけり
深くを浅きけりまきりに強きくくくくくくくくくく
ひまする子れくくくくくくくくくくくくくくくくく
りすくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あやゆり足くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
若ねもくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
門を入る心許ふふきゆの力くくくくくくくくく
浪士の海士のまき入りやけり
対するきえゆくややあはく
はくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
めくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
指さやけりあはくくくくくくくくくくくくくく
かきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

心のけしきもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 ぬく心もつゆ流るるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 るるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 尺付くはさしつきのけしきもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 此方より山を隔る田井の柳や春を知らぬ村雨の古里といふ
 尾上つき丹波の夜かきつる新柳のそよ風は逆さぬかきつる
 るるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 同のつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 うのつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 女心のゆたふもつゆ流るるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 りつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 あつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと

入世のつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 此方より山を隔る田井の柳や春を知らぬ村雨の古里といふ
 尾上つき丹波の夜かきつる新柳のそよ風は逆さぬかきつる
 るるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 同のつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 うのつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 女心のゆたふもつゆ流るるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 りつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 あつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと

入世のつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 此方より山を隔る田井の柳や春を知らぬ村雨の古里といふ
 尾上つき丹波の夜かきつる新柳のそよ風は逆さぬかきつる
 るるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 同のつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 うのつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 女心のゆたふもつゆ流るるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 りつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと
 あつぎのつぎのつぎのみこれに代りてのささるるもたもたふのゆとゆとを心道の拙むと

ありてみみく大根かきし秋の風
木石の縁なき世の人北ち度うま
思ふまじのおろしはるる木石の秋

善光寺

月影や四門白雲と思ひし
吹飛するる海百は世かゝれ

秋のわろ

月影を言代の過客うらやまふ事と又旅人多る舟の上
生涯をうらやまのほどく老をわらふものありし旅
旅をすまふとす古人もおぼく旅をせむる事とわら
事とすまふとす古人もおぼく旅をせむる事とわら
さすて七十年の秋江止れ破屋の古事とすまふ事
もこれまじき世のやうき川の舟とすまふ事とわら
物とすまふとす古人もおぼく旅をせむる事とわら
もつはるる秋の破れをほく了堂の秋はてす三里とす
すまふとす古人もおぼく旅をせむる事とわら
風とすまふとす古人もおぼく旅をせむる事とわら

月の戸とほろりて代了のわろ

西の山にたぐりけしきし言そえとて松敷くろく若志
くさくさ卯月かたて程さや十糸片の松をばて山田八
さかしの法をいひくのはいふやと好の山字よらのわれ石上村
小虎若窟と終ひけしう妙福の死葬はあはれ山の石をま
尺くさく

本塚の危を待たしむる本を

と云はぬ一旬を桂子跡し作りしうれより殺生石をゆく
徳代よりうらまへ送りしうはけのものと種冊をよとてと
やきききとて字を付しものつれ

神を横りてしんむけよはれしん

殺生石を湯泉の物さくけしめり石の毒毒いふとてわらひ
降降のたぐひま妙のま村とぬはしかきあり死す又後

いふあうしは物ハ芦花の里よりく田の畔に跡つ此雪の歌
か戸部某の可物尺さくやれしものこのまひ決まを
いひくはほらとやと替ひしをよはれ物のうけしうはら
しつれ

田一板 植すしらすあ 柳 うらま

心許みふくあかきぬるまにきり川の岸にかりて松かさの
まらぬいし物とてまらぬいし物とてまらぬいし物とて
舞の三園の一より風語の人をよむむ松風を耳に跡し
紅花をて飾りて青葉の梢にゆれあり卯の世の白ゆき
草の花は咲きひて雪をてうらま心地をすう古人冠をいし
衣襟をて向く人よりこれと清柳の雪をてあまをいし
うのちをかきし舞のたぐれえられ 曾良

しんりつしんをいひてはなれりしをいひてはなれりし
竹丸はよきあつたりて是なりしをいひてはなれりし
けりしをいひてはなれりし

まゝいひてはなれりしをいひてはなれりし

岩はなれりし

代限の松をいひてはなれりしをいひてはなれりし
れりしをいひてはなれりしをいひてはなれりし
此は昔のついでなりしをいひてはなれりし
松をいひてはなれりしをいひてはなれりし
後より代りてはなれりしをいひてはなれりし
けりしをいひてはなれりしをいひてはなれりし
けりしをいひてはなれりしをいひてはなれりし

白松の樹をいひてはなれりし

松よりいひてはなれりしをいひてはなれりし

名をいひてはなれりしをいひてはなれりし
四とてはなれりしをいひてはなれりし
とてはなれりしをいひてはなれりし
はなれりしをいひてはなれりし
やうしてはなれりしをいひてはなれりし
松の林に入りてはなれりしをいひてはなれりし
てはなれりしをいひてはなれりし
とてはなれりしをいひてはなれりし
且つてはなれりしをいひてはなれりし
てはなれりしをいひてはなれりし

上平阿子有... 此中... 杉島... 寺ハ... 対... 十... 一... 依... 去... 十二... 平和泉...

44

七二

傳... 船... 十... 三... 御... 三... 御...

45

七三

かゝる御心を好むは...
高山素心と...
くろく...
かゝる御心を好むは...
尾花...
志...
涼...
くもよかひ...
紅粉の花

酒掃を...
禁...
山...
法...
か...
松...
佛...
入...
花...
紅粉の花

若くは子鹿嶋の事をも
波こしぬむるし何しとわみさくは事
酒田の事跡りもかきねる小陸島の事やう定むるさく思ひ
狗といふかたし久く加賀の府まゝ百三十里の北風の事
とこのゆゑに北風の地やゆゑをも何しと定むる中玉一
は海より出れば百九の島原の島に津をあらわす病者
るをも記さす

又月やうりと考の松平の仙居
何し海や休渡り橋よ天何
り六親しるる子し大もり物之しれよさかぬ一
影もをこつれ侍ハ枕引まてて病者も一日隔
向の方こそつれ女のかつ二人をうしとめゆきえりるもの

こねるも父も物許すもまけハ残存不新侍とこれ
の遊女ありし侍者冬定すしと式并かしものこも返り
何すハ古山子之し又きとめはつれぬと侍者も志や
あり志はゆめやうけしめとくやうりゆ月の子れき
あきりしとらうとささめぬ大ぢりゆは業因ゆ
侍りぬしものゆをゆめしら物入るゆと松立子香
子むらひゆゆと志しぬ旅跡のゆとゆと又未だゆ
しゆ侍れハ尺しゆゆもゆゆを志しゆゆ人衣ゆゆ
ゆゆ大益のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆ不使ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆ一人ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

おさんやれかよのらおまきりし

山中の温泉にゆくはきりねの森法師の足跡をゆめふ左の
ら陽の秋夕米のつら山は三十三所の山札子よきまの
は大意大徳の傳を安置しんひて政令のあつたるに
谷組の之をこころに傳へし言をこころに古松松ありて
昔より山の山寺の上人を造りしけり休休の古松

石山は石ころまわりし秋の風

温泉の湯に母のこころを伝へし

山中や菊のよきしぬほのまわり

ゆきとすもの久米の助とてゆきとすもの父の伝を
みはの良室の良室のむしにまきりし風影のまわり
らまきりし山寺の上人を造りしけり休休の古松

一村お洞の料を讀ましとて文かかると本ぬ

曾良の娘を病む侍女を長をゆきとすもの父の伝を

ゆきとすもの久米の助とてゆきとすもの父の伝を

とてまきりし山寺の上人を造りしけり休休の古松

ゆきとすもの久米の助とてゆきとすもの父の伝を

ゆきとすもの久米の助とてゆきとすもの父の伝を

大聖寺の妹か令る寺にまきりし山寺の上人を造りしけり休休の古松

ゆきとすもの久米の助とてゆきとすもの父の伝を

とてまきりし山寺の上人を造りしけり休休の古松
ゆきとすもの久米の助とてゆきとすもの父の伝を
ゆきとすもの久米の助とてゆきとすもの父の伝を

停しも残破をうへ陽のまをすわひまらけり庭中
板られハ

庭掃くわや寺子らハ 板

五妙ぬきりそ子難あうりま控の板おの鏡吉崎の入口
を舟に梅きりて以越の松を君あめ

板をすうり花をり 波をもとてんをう

花をりこれらハ 板の松 西行

此一そし原系書うりも一辨をわうりものハ常用の指
をまうり

丸系原新書の長光古ふ因りれハあぬ又兼河の北枝
もの板神子尺送くはまかしまのい木の雲の風系
すうり之ひりけりおそゆえれあは化言外ハあゆり既

とらぬりてみり

物さこ痛引さく好修りれ

又十下山入て小平古を礼す是天浮海の佛寺し邦撰お里を
廻てかう山けは法をあしりて昔ふんてくわ福井を
之里けりこれハ飯志とめてわうりたてぬのそをもり
そにぞ哉いそ古ふはまゆりつぬの事うりはるをあうりそを
あぬおすそいゆりしゆいそあきふゆひてゆりや將死る
よや人そあお付れハ中て存命しそそそもをり 西市中の
そそり入てあやハ小家そそそ系瓜のそそりゆり 終次け
きりにたわうりそゆりさきハあらまうり門をりけは院
けあ女のあしゆりわうりあそそあゆり切やゆりハ海
アゆりしそこの方ゆりぬり 用ゆりハあゆりあゆりあ

しらぬゆかり 雲我を尋ねてとくをくちを跡う通
けみりよすしむむいひくみの玉の付し物にすけ
れく大喧の夜入八層良も侍あうりまうぬ越人
飛さく如ゆり家入集つお川子荆れ父子をふき
人の旅訪ひく蘇生のもろをく且懐い思ひ
旅の物くさくまをさきさうり長月おるられハ侍
おへと又舟うけり

蛤

あつて子

これゆく秋了

俳諧一葉集文之部

古学庵佛号

幻窓湖中

坎窩久減投

稿也並辞

菊の葉散りさうえ竹の葉も散り牡丹を紅白の是非
頂つて五井のけりさうり物あはさゆりさうり
花吹ひのりれりさうり梅も山に渡りさうり
極風去るさうりさうりやかみひさるれ株さうり
花うりさうりさうりさうりさうり
人味くさうりさうり向友門人さうり
さうりさうりさうりさうり

鳥賦

一鳥小大ありて、其も愛もあらず、鳥鶴といひ、大を以て、角を
 とし、小を以て、及、哺の若く、懐く、と、中、の、勇、子、と、け、り、成、は、
 人、た、あ、り、ゆ、く、人、も、つ、け、記、は、り、翅、を、あ、り、く、二、星、の、標、と、
 け、れ、り、成、は、大、事、の、や、り、く、を、知、り、ま、り、な、り、と、さ、り、く、さ、り、と、あ、
 ら、り、と、い、ひ、と、い、く、さ、り、の、あ、り、の、あ、り、と、さ、り、と、さ、り、と、さ、り、と、
 ゆ、く、り、人、と、い、ひ、の、才、ま、り、情、め、り、と、い、ひ、の、情、め、り、と、い、ひ、
 か、り、ち、を、あ、り、と、い、ひ、の、中、の、い、ち、の、い、ち、を、は、り、と、い、ひ、又、い、ち、を、
 う、り、と、い、ひ、を、い、ち、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、
 性、信、信、信、信、信、信、信、信、信、信、信、信、信、信、信、信、信、信、
 を、お、そ、れ、り、肉、の、味、を、あ、り、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、

啼、け、り、人、不、可、の、音、を、抱、く、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、
 ち、り、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、
 を、帯、り、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、
 う、み、の、地、を、あ、り、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、
 へ、踏、り、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、
 ち、り、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、
 さ、り、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、
 後、り、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、
 と、甚、し、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、
 三、星、の、全、鳥、の、成、を、あ、り、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、い、ひ、と、

笠張院

りしに... 大なるれ
れく... 大なるれ
系此... 大なるれ

銀河序

お陸... 大なるれ
横... 大なるれ
か... 大なるれ
て... 大なるれ
一... 大なるれ

昔... 大なるれ
く... 大なるれ
よ... 大なるれ
き... 大なるれ
後... 大なるれ

海や川

伊勢記

伊... 大なるれ
あ... 大なるれ
あ... 大なるれ
海... 大なるれ

通明りく

七ツ年かきひりり一宿合阿 松尾

雲竹轢

海の素門を竹とらふに像をわらふにありてのまじり
ありあけははしを画してはるききよきまらわら
其は十手ゆきり予は既つとすらりては記の中
一と書名のからるるゆききよきまらわら
とらふす

こらあけあききりし秋のき

梅折賛

此折のそんて名けりもの見上りてしききよきまらわら
なは枝葉のそ物にわらわらしつわらわらわらわらわらわら
姓の折のそあききよきまらわらわらわらわらわらわら
ゆききよきまらわらわらわらわらわらわらわらわらわら
のそ一と書名のからるるゆききよきまらわらわらわら
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
此はらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら

梅の木の

卒塔婆山阿賛

ゆききよきまらわらわらわらわらわらわらわらわらわら
かきつてはるききよきまらわらわらわらわらわらわら
今に現るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

あつたかきかきうたのほつとさし終るるれい
さうさうの月をかこみこし大余妙興の共さうさう
し時際をさひて悔の産しし大余妙興の共さうさう
さうさうの産魚鮫の産さうさうさうさうさうさう
さうさうの産を破る杖を折し業をすつ既すら十
けりし本店をい片すかこしし心すなまを放
れさうさうの十手ゆり十年のすさうの車こし
ゆすし生れておれす跡をさうさうは花大匠の市の人
る

入月の法ハ机 廿四陽之丸

風景録

金草を纏りしこ敷くさゆらさるハ士の志し又徳備を
さうさうの君子のいさゆりしすね合ふ事ハ義を骨
わけて骨を結り老若をさうさうさうさうさうさう
肺肝のさうさうさうさうさうさうさうさうさう
れさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
治をさうさうさうさうさうさうさうさうさう
いさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
月をさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうの母子さうさうさうさうの産さうさうさう
さうさうの五十手さうさうさうさうの公のおさうさう

松竹の言を九尺丈うの枝さしむるの一文枝上らんをか
きひの世紫雲とてさやうの風光を思やうのあまうひは起
す空等子仙翁の以故に似て浪の影をゆく高村牡丹をおま
り人壽出を所つたてて他はさうもふく人小福を笑て
人平あそびの松木柑新の空をくはる枝葉のかたはる松
竹のいさゝか高村の意四村の空をくはる松竹のいさゝか
のうら楽天曰松よく喬音を吐かす松葉をくはる松竹の
よるのうら心を慰すのよるのうら心を慰すのよるのうら
心を慰すのよるのうら心を慰すのよるのうら心を慰すの
よるのうら心を慰すのよるのうら心を慰すのよるのうら
心を慰すのよるのうら心を慰すのよるのうら心を慰すの

元禄四年仲秋日

文淵舎日記

暖帳日記

元禄四年未卯月十八日暖帳を遊んで古来の松竹をくはる
とてす来て号をわけていそぎ論をすを於てはくくくく
きよしし清子つらう春川のぬるる今中の戸隔一戸ある
休むるさうむ 札一紙 文庫 白氏文集 本約一人一有
去後物語 源光物語 去休物語 松葉集を道徳の辭
張きしるべきの思ふべきの幕子くくく右酒一盞をさ
たてし松のふすし酒菜の物くくく京より持来たまひ
糸の足跡くくくこれ清閑くくく
十九日午後臨川寺詣つ大井川あそびくくく扇山右うら松

仕尾の甲をけりけりたる花を清く人ゆふらひお屏し松の尾林
の中ふ智恵なきていりりすて止らぬ鳴きと三所りり
わらわらふんかの仲子、約と久しきとてし約とふの徳と
大ゆらうのつれなふとくこれとてふふや言ふ三軒屋の味
草の中より志しし後を植へりかこく、務練は後
より起りしと後子、数中の花若くふれり、昭君村の柳、
女房の花はわらわらふりやう

くわらわらわらの子とわらわら人れ
あふふ花れまけりや風の能
斜る及て首林をうめりん北東より来りて古木をうめり
育らう外

廿日 水噴鳴のあふん、胸紅に赤る古木を中の吟とて清く

けりみゆふ子供のけりわ妻人けり

首林をハむりしけりし、のむらさきに、こゝろ、新橋すふ
あしはゆり、みりれり、昔のきり、今も、今も、今も、今も、
こころ、こころ、こころ、こころ、こころ、こころ、こころ、
石燈、松と、首の、かられり、竹、椽、も、さう、柚の木、一、花
か、け、り、れ、り

柚の赤やむりし、志のせん、料理の、
は、り、ま、り、大、木、敷、を、り、り、月、夜、
あ、ら、わ、ら、ん、い、ら、と、あ、ら、ん、い、ら、と、あ、ら、ん、い、ら、と、

古木、足の方より、若木、を、酒、業、の、もの、れ、と、照、り、と、あ、ら、ん、い、ら、と、
あ、ら、ん、い、ら、と、あ、ら、ん、い、ら、と、あ、ら、ん、い、ら、と、あ、ら、ん、い、ら、と、
あ、ら、ん、い、ら、と、あ、ら、ん、い、ら、と、あ、ら、ん、い、ら、と、あ、ら、ん、い、ら、と、

て中ぬ水く杖より子に信じて一巻巻の四巻をありて家故に
あし

わがし後示瑞ゆふひしすまれ子

又云

糸信とくろろ杖ニ丈くはにて楓一本かおまふふを
えいひてま

くろ楓まふをくまへ一さう

鳥をうたり

物寄の巻をくまへてくまへてくまへ
か代やおきれ心く物寄をくまへ

廿三

まをわハ木魂よりゆりて文は月

文の板や木魂のゆりてゆりてゆりて
笋やわさきまお対此柱のすまみ
まの積やゆりてまへてゆりてまへて
一ま(まのゆりてまへてゆりてまへて)
ゆりてゆりてまへてまへてゆりて

廿四 題首柿令

巨櫃の細く木をむくまへてまへて
凡此

まへて及てまへてまへてまへてまへて
まへてまへて凡此まへてまへてまへて
廿五 子那大津より史邦丈草尺訪

題首柿令

你對啄峰伴鳥魚 就荒森似野人居

枝取今夕赤丸印 青葉く取堪字書

昌小督墳

強挽懸情出深宮 一輪秋月野村風

昔季伴好歌琴韻 何處孤墳竹樹中

茅軒(よ)ニ登りて茂く樹の宮 文章

途中の吟

ほくまけふくや 枝と梅さくら 史邦

有山舎と感句

杜門覓句陳年已 對客揮毫泰女游

乙州来りて武江の影并智よ分の御記一巻廿中

半信の書眉集入まふとら後子 白井峠をくまふりかゝる記 廿角

獨りの黄より ねんじり 月

中分より 休人子とくさふふをひとら

字取の山女子 ねんじりをかゝるわら

つとくをええゆきと 堪 思

中の別とらうより 雷煙電降を我らととら 対電降

大まかか 秘のよ ちひさふの里栗のよ

廿六々 芽如しよりニ多きまけの 枝の宮 文章

くさけの草やうりくさくさ 女赤 芭蕉

桐生くものよけをふ角より 古来

人のくさくさ 初瓶まのり 文章

くさくさ 三度瓶柳のちやうん 乙州

廿七日 人妻より致るは京
 廿八日 言より杜中よりをいひ申して海邊に足る心奪お車
 くる時ハ男をいひ申して陰居て火をゆめ陽井より水を書
 くる飛を致すとふくむ時ハ飛をゆめ火を帯をいひ申す
 時ハ蛇を言ふとふくむ時ハ臆怖たり根安玉莊園之條言ふ
 をいひ申してゆめをつくまふ言ハ聖人君子の言ふゆめ
 致るは夢想お世の事相違なり言又志の事いひ申す
 言ふとふくむゆめ念言ある事志深く信得由里申す
 志のいふゆめをいひ申して起ふゆめ御の言をいひ申す
 百りのゆめ御の言をいひ申して起ふゆめ御の言をいひ申す
 或時ハ世の事志の事心奪お世の事志の事心奪お世の事
 志の事志の事志の事志の事志の事志の事志の事志の事

廿九日 言より其砂方館の訪を足る

高館後年 天皇似曾 衣川通海月如了

世の事志の事志の事志の事志の事志の事志の事志の事

廿日 言より

江州平向の照寺李由訪る尚白子那る消息

竹の子やうの事さうの事さうの事さうの事さうの事

いふ事此風見身つくわ月如 尚白

是夜

ちよつとまふとらう一筆標

二日

曾良才より芳世の言をいひ申して諸作より武江向
 友門人の野村の言をいひ申して諸作より

卯月の中は快すの浦一尺とて人々其山に暮れしりけり月
の光に照らし喜ぶる人々ありて其山浦のまじりて秋を
あそぶるややや物にほいあそぶるまじりて
あそぶるにほいあそぶるまじりて

更科姨捨月一節

下し姨捨の月一人もあそぶるまじりて月十五の
まじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて

あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて

義をわたりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて

あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて
あそぶるまじりてあそぶるまじりてあそぶるまじりて

ふもやけんものしるはらのあゝ 旅上 くらげ

田中一平がまろくしてな妻共が賀正引こし付くといふ
人も多けさかのみ言所者中此新むくといふしむく付こ
といふ人もいふはちの言つていふ言つていふ友となくい
ふれいふちのいふ言のいふ言のいふいふし袖をまけ
ふの言は言の言の言をいふ言の言の言の言の言の言
の婚の君がまろくしつらにゆく様本之水自身まろくは
尺の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言
尺の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言
五月廿二日の海船の言の言の言の言の言の言の言の
かろく言の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言

いふ言の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言
いふ言の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言

歌一

旅の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言

とふいふ

いふ言の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言
いふ言の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言

くらげ

五十年やらのいふ言の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言
みの史の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言
とふいふ言の言の言の言の言の言の言の言の言の言の言

さう雪子の御むくろ紙子のやをてきたるの舞のなをて
 うたね志の一人目志のひよわめんあや陶来る舟
 のたてし御の河あこころ遊ひ一人か家もの影よく懐く
 子執女の紅裙と花婿の翠袂をうたにうたひくぬ
 めん行書のおり御くさふさふさう上戸か長く
 山よりをめぐりそりぬる嶽うらな鏡の名ゆりて
 おもくんのゆへははるをたぬすくや御先主にお手
 にあたま小杯のうけかたれく月寺の入あはせぬ
 金しむくろくし

